

平成24年度
「大阪市子どもの読書活動推進連絡会」
実施報告書

日時 平成24年10月12日(金) 午前10時～12時

会場 大阪市立中央図書館 大会議室

平成 24 年度 大阪市子どもの読書活動推進連絡会

1. 日 時：平成 24 年 10 月 12 日（金） 午前 10 時～12 時

2. 場 所：大阪市立中央図書館 5 階 大会議室

3. 議事次第：

【事務局報告 1】

「第 2 次大阪市子ども読書活動推進計画 素案（案）」について

- ・ 内容説明
- ・ 学識経験者、社会教育関係団体代表者より助言
- ・ 意見交換

【事務局報告 2】

「第 2 次大阪市子ども読書活動推進計画」策定に向けた今後のスケジュールについて

目 次

○第 2 次大阪市子ども読書活動推進計画素案（案）に対する意見交換・・・ p. 1

○平成 24 年度大阪市子どもの読書活動推進連絡会出席者名簿・・・ p. 7

○平成 24 年度大阪市子どもの読書活動推進連絡会事務局名簿・・・ p. 8

○第2次大阪市子ども読書活動推進計画素案（案）に対する意見交換

脇谷邦子（同志社大学講師）

現状分析や課題の洗い出しは重要。第2次計画素案では、それなりに課題は洗い出されているものの、取り組みについての記述は不足しているのでは。

学校図書館の充実が課題。読書環境の整備、学校図書標準の達成、人の配置（子どもと本をつなぐ人）を本気で考えないと、状況は大きく改善されないのではないか。大きな自治体なので、一気にとはいかなくとも継続して取り組む必要がある。

ブックスタート事業への参加者数が、保健福祉センターから子育て支援実施施設へと配布場所等の方式変更に関わって、大きく減少している。子育て支援施設の利用が増えたのは良いことではあるが、もともとブックスタートは「もれなくどの子にも本に接する機会を」というのが趣旨。もう一度趣旨に立ち返って再考していただきたい。

ヤングアダルト（YA）サービスが重点課題に取り入れられていないのは残念。大阪市立図書館は、かつては、全国に先駆けて、アップルコーナーを設置し中高生を取り込むYAサービスを展開してきた歴史や伝統のある図書館のはず。幼児、小・中・高と通じて、生涯にかけて読書を推進するにあたり、YA層の利用の落ち込みはすごく気になる。YAサービスは学校図書館連携が不可欠、その点も含め重点課題に挙げるべき。

若い親世代の利用の減少、本を読む子と読まない子の二極化等の現状の背後には、社会的変化、特に大阪市の生活保護受給者の増など貧困問題などに大きく関係しているのではないかと。図書館だけで解決できる問題ではないので、学校や地域、福祉部局等と連携し取り組む必要がある。しっかりした仕事につき貧困から脱出するためには、貧困層の子どもたちにこそ、図書館で自由に本が読める環境、読書習慣の形成のきっかけをつくる機

会を与えることが必要とされる。大きな課題ではあるが、アウトリーチや障がい者サービスと同じ程度には、貧困層の子どもへの働きかけが必要ではないかと思う。

若い親世代への働きかけとしては、ブックスタート事業は非常に有用な取り組みであり、そういう点でもブックスタートの配布方法の変更については見直すべきと考える。

木原俊行（大阪教育大学教授）

子どもの読書活動の充実を目指してさまざまな取り組みを構想し、さらに、その基底には読書コミュニティの構築という考え方を据えているといった、全体を貫くコンセプトに共感する。また、具体化を図るうえで、第1次計画に基づくアクションの成果と課題を踏まえている点もよい。

その上で、この計画の枠組みについて再考して欲しいことをいくつか述べる。ひとつは、今後の取り組みの記述が薄い、中期計画としては量的にもう少し書き込まれるべき。2章の項では、計画というよりは理念を謳っているにすぎない箇所もある。また、具体取組みを記述している箇所などは、項目・見出しをつけて整理すべき。

中期計画である以上、5年間のざっくりとした示し方に続いて、年次計画とまではいかなくとも、せめて5年間を前半後半に分けるなどして、前半にエネルギーを注ぐもの、後半にリソースを持ち込むものといった整理をされるとよい。さらに、一部の取組みについては、数値目標を立てるなど、計画の達成度を確認・点検できるような記述も望まれる。数値目標を書けばそれに縛られることもあるが、あいまいにしておく中期計画としての役割を果たせない。

最後に二次計画策定案の内容面での要望を述べる。子どもの、学力向上を考えると、「読む」だけではだめで、読書後に感想やあらすじを書いて友達に伝えるといった読書コミュニティの構

築が重要。一緒に読むだけでなく、読んだ感想や考えたことを書いて、対面やオンラインで、二次的・三次的に交流することが必要。学習指導要領の枠組み自体が「書く」ことを重視している点も踏まえ、「読んだこと」とそれに基づいて考えたことや思ったことを「書く」ことについてのアクションを、学校や図書館で、いかに子どもに促し支えていくかについての言及を、第2次計画において増やしていただきたい。学校教育、子どもの学力向上に関わる者として、それを要望する。

大阪市 PTA 協議会研修委員長（大橋）

12 学級以上の学校には司書教諭が必置となっているとあるが、12 学級未満の学校は？←（指導部）「本市ではすべての小学校に司書教諭を配置できるよう資格の取得など進めている。」

子ども時代に学校で休憩時間などに小分けして本を読んでもらっていた。それをとても楽しみにしていた記憶があるので、家でも未就学の時から小学校を卒業するまで、読み聞かせを軸にコミュニケーションをとりたくて、父母ともに子どもに読み聞かせを続けた。しかし、なぜ子どもが本に興味をもたないのか不思議だったが、木原先生のお話を伺い納得した。読み聞かせのボランティアや P T A 活動をしている際にも子どもに対する親の関わり方が希薄になっていることを感じる。親として子どもにどう関わるか、読書にどう向き合うかを考える契機となった。

大阪市 PTA 協議会広報委員長（中村）

学校、図書館、ボランティア、多くの方がこの子どもの読書活動推進計画に携わっていることに驚いた。取組み中の蔵書数や来館者数の増などの数値目標・指標については、適切か？それらの数値達成が、果たして子どもが本を読んでいることになるのか？数値目標を立てることは必要だが、設定については熟慮が必要かと思う。

ブックスタート事業については、「三つ子の魂百までも」ではないが、乳幼児の頃からの読み聞

かせは当然重要と考えるも、「文十二、十五理、未決まる」という言葉があるように、「読む」ことだけでなく「書く」など他の活動にもつなげていく取組みにしていいただきたい。学校の宿題もインターネットで調べるような時代になっており、活字離れは親世代も同様かと思う。手紙を書いたり、文章を書く取組みにも発展させていきたい。ヤングアダルト層の本離れは、親世代からの声かけも必要、少しずつ改善していけばよいかと思う。

また、ボランティアの横のつながり、ネットワークづくりを上手にしながら、簡単なことからみんなで取り組めるようなきっかけを与えてもらえるとうい。取組みの周知も必要。

大阪市生涯学習推進員協議会副運営委員長（三味）

私自身も幼稚園や小・中学校でそれぞれボランティア活動をしている。幼稚園や小学校では、子どもたちの目がきらきらと輝き、読み聞かせ等のボランティア活動自体を楽しいと感じさせてもらえる。一方、中学校の「元気アップ」事業での活動になると、先生方にも異動や温度差があるためか、学校図書館での本の貸出返却の支援だけで、「中学校でも読み聞かせ」という取組みにつなげていこうとしてもなかなか実現できない。ボランティア同士の引き継ぎも情報交換もないままになってしまう。せっかく小学 6 年生まで熱心に聞いてくれる姿勢が出来ていた子どもたちなのに、これまでの取組みが途切れてしまうのではと感じる。

本好きの大人に成長した我が子もここ 1~2 年はスマホで活字を読んでいる。世の中の状況が変わってきている中で、「スマホでも本は読める」だけでよいのか？低年齢でもこういう現象が起きていてよいのか？読み聞かせをしたり本を読めと働きかけても、親世代が活字を読んでいる姿を子どもに見せているか？そういう環境づくりをしているか、振りかえるべきかと思う。読書推

進にかかわって、家庭から出来ることはまだあると認識している。

大阪市生涯学習推進員協議会運営委員長（柳本）

各学校で図書ボランティアが立ち上がったが、私も関わった一人。子どもたちが本を読んで、さまざまな世界に入り、出会って、読書の楽しさ、大事さを伝えることが出来ればよいかと思っっている。私たち生涯学習推進員もボランティアとして活動しており、生涯学習ルームの事業の中で、地域連携支援事業やはぐくみネットなど学校の中で取り組んでいるものもある。この2次計画では、ボランティアとの連携・協力、家庭と地域、図書館、学校との連携・協力等が挙げられているが、生涯学習推進員も地域連携支援事業やはぐくみネットなどで、皆さまと一緒に子どもの読書推進の取り組みを拡げていきたいと考えている。同じ学校を拠点とする活動・事業として、今後とも連携を強めていきたいと考えている。

事務局（指導部）

学校図書館の充実については、蔵書やその活用方法について考えるべき課題と認識している。財政状況が厳しいおり、学校関係の予算が年々減っているなか、図書予算の確保に努めている。NPO等からの学校への寄付などの申し出についても「本」で寄付していただくようお願いしている。新区長・区役所に対しても図書の充実、読むこと、書くことの必要性を伝えている。

新しい学習指導要領では、言語活動の充実が叫ばれ、読む、書く、話すことを重視している。先行して取組んだ小学校だけでなく、中学校においても、各教科で学習・研究授業を進めている。中学校の元気アップ事業については、システムを作った間がなく、まだ十分に機能していないところもある。先行している小学校での取組みも、図書ボランティアによる熱心な取り組みが実現できているところも多いが、進んでいないところもある。今後は、継続して、その活動内容を充実して

いく必要があると認識している。

事務局（図書館）

ブックスタート事業の実施施設の変更に伴う参加者数の減少については、ここ数年実施施設数が年々増えており、参加者数についても増加の傾向にはある。大阪市においては事業を区に移管するということが議論されており、子育て支援事業についてもその検討の一つであると聞いている。ブックスタート事業については、子ども青少年局が主管しており、ご指摘の「もれなくどの子にも本を」という趣旨については改めて伝えていきたい。

YAサービスについては、重点課題にすべきか、どういう書きぶりにすべきかについては、事務局でも大いに悩んだところ。中高校生の忙しい生活実態の中で、来館を促すのか、学校での調べ学習などの活用を進めるのか、現状の分析とともに議論し検討していかなければならないと考える。

「二極化」については、各区の実情はさまざまであり、地域図書館の年齢別登録者の構成割合も区によって大きく差がある。今後、区が主体となって独自の事業が進んでいく中で、重点課題にもあげている区の実施計画を策定していきたいと考えており、区役所とも連携しながら対応していきたい。

今後の取組みに関する記述が薄いというご指摘等については、再度、整理、検討していきたい。

計画のスケジュール感についてのご指摘は、事務局でも議論になったが、大阪市の市政改革プランや大都市制度への移行をにらみながら進めていく必要があると考えている。

「書く」ことの重要性ということでご指摘頂いた点については、職場体験で来館した中学生に自分のおすすめの本について書いてもらい各館で展示するという取組みをしている。同世代が勧めているということで、若い世代がよく見ていると聞く。また、One Book One OSAKA 事業の投票用紙では、お勧めの絵本について、お気に入りの

理由を文章や絵で自由に書いてもらっており、子どもたちの気持ちがさまざまに伝わり宝物のように感じる。この事業も書くことへつながるのではと考えている。

淀川区連絡会代表（松尾）

子どもに具体的に本を手にとってもらうのに一番身近で効果のあるのは、やはり、学校図書館。地域図書館へは行けない子もいる。学校図書館の充実が一番大切。蔵書数の充実だけでなく、どのように子どもに本を手にとってもらうかが大切。数年前の連絡会で、学校図書館の蔵書のデータベース化について申し上げたが、予算等の要因により個々の学校で対応するしかないとのことで、進展していない。すべての蔵書をデータベース化した学校もある。データベース化が実現してこそ、図書館にどんな本があるのか、今、貸出に出ているのか、作者やテーマに関連した本などを調べて手渡すことができる。大きな読書推進力となるはず。示されたこの計画だけでは、子どもは本を手にとらないのでは？データベース化を手作業で細々とやっているところもあるが大変労力のかかる作業である。2次計画では学校と市立図書館の連携強化の項目が挙げられているが、市立図書館の本のデータと学校図書館の本を結びつけるということはできないのか？子どもの読書を促すことに繋がっていくと考える。

マルチメディアデジタイズ図書について、図書館開催の講習会など各学校に周知しているようだが、多忙な先生のこと、講習会参加が難しいだろうから、各学校の特別学級、特別支援学校に配布して、実際にどういうものか見てもらってはどうか。

外国語を母語とする子どもたちへのサービス拡充について取組みを挙げておられるが、日本に来て困るのは日本語の理解であり、翻訳されているものがあれば、日本語の図書とセットにして紹介するなど工夫が必要。日本語を外国語として最初に学ぶとき、絵本は必ずしも簡単な言葉ではな

い。順番に読んでいけば英語力がつくオックスフォードの教材のように、日本語の図書をレベル別にして情報提供する方法も考えられるのでは。

天王寺区連絡会代表（三輪）

5年間を検証し第2次計画を策定するという取組みはよいと思う。大阪市の読書活動においては、学校図書館と市立図書館との最近の連携については増えてきているし、ボランティアの流れも出来てきたが、やはり、踏み込んで教育に活かす学校図書館活性化事業の展開という点では、まだまだ今後の取組が必要と感じている。また、それに関する記述も少ないと感じる。

文部科学省が「学校図書館図書整備5カ年計画」としてこの4月から始まった取組の中で、学校司書の配置にも言及があるにも関わらず、市の2次計画素案には、学校司書の文言が一言も出てきていない。その辺の取組みはどうされるのかお聞きしたい。

10月に島根県の「子ども読書県しまね」の取組みを伺う機会があったが、4年間の取組で目に見える形での成果が出ており、いろんなヒントを得られた。島根県では、中学校の学校図書館整備に教職員全員で図書館改造・整備にとり組むという要件で各校に50万円が配付されており、図書館にはなかなか足を運ばなかった先生方も整備に関わることで、その後の図書館の使われ方や子どもの利用などに興味を示され、図書館利用に繋がっていくといった効果が報告されていた。このような少ない費用を効果的に補助する工夫をして頂きたい。

2次計画の今後の取組みの中で、「図書館担当教員以外の教員も含めて全校で協力体制を組み、学校図書館運営に関わる体制を整える」と掲げているが、図書館司書教諭の先生一人が頑張っても学校全体での取組み、大阪市としての取組が背景にないとなかなか進まないという声をよく聞く。是非、大阪市として学校図書館を利用しての

教育に力を入れていくといった姿勢を見える形で打ち出して頂きたいと願う。

また、島根県の報告では、学校図書館は、小中学校9年間を通して、課題を見つけて自らが解決する力、学ぶことを学ぶところであり、生涯にわたって必要な力を育む9年間であるという考え方をされていたのが印象に残っている。

知識創造型図書館改革の検証について、有識者意見を図書館ホームページで見たが、図書館が提供すべきサービスについては、コスト対効果で捉えていくのがふさわしいサービスと、次世代につながるサービスや学校支援などコスト対効果だけで考えては不十分なサービスの両方が混在していることを考えていかなければならないとの言及がありうれしく思う。

西淀川区連絡会代表（鵜久森）

3か月児健診参加者の子どもたち全員に絵本を配られていたブックスタート事業が、どの子にもではなく、子育て支援施設に予約してから出向かねばならないという方式変更になって残念ではない。いろんな家庭環境の子ども達が平等に本を手にとれるというのはブックスタート事業のいい面だと思っている。本に触れた事のない子ども達にいきなり小中学校で読書するよう働きかけてもなかなか難しいことではないか。読書につなげていくためには、一番最初の本の出会いであるブックスタートで、すべての子どもたちに1冊の絵本が手に渡るよう、そのための予算をぜひ確保していただきたい。区役所なのか市なのかかわからないが、行政に切実に要望する。

また、学校の図書室の充実について、数校、図書ボランティアとして関わっているが、ほこりをかぶった本がたくさんある学校図書室の現実をどれほどの方がご存じなのか。蔵書の充実では、新刊も魅力的だが、日本古来の文学もすてきな日本語であり、素晴らしいものがある、蔵書を増やすばかりでなく、一人でも多くの子どもたちが本を手にとってみようと思うことが学力向上につ

ながっていくのではないか。学校の図書室の充実・整備については、子どもに本を手渡していく効果的な方法を考えていただきたい。

事務局（指導部）

文科省の新学習指導要領に対応した教育環境の整備充実のための地方財政措置については、調査し関係各省へ話をしてきた。この措置は地方交付税制度に組み込まれており、国が地方自治体に対して交付することで、国内におけるすべての自治体の住民が標準的な行政サービスを受けるための財源を保証するとともに地方税収入の偏在を調整し、自治体間の財政格差の是正を行うというもの。

地方交付税法の中には、国は地方交付税の交付にあたっては、地方自治体の本旨を尊重し条件をつけたり、その用途を制限してはならないとされており、財政状況がきわめて厳しい本市においては、学校図書館関係に地方財政措置を充てるよう要望したものの、振り分けることが出来なかった状況にある。

ただ、学校図書館の整備で、「新聞配備」については、学校予算の中に追加分として配当し、その趣旨も学校に伝えている。人的配置については対応出来なくて申し訳ない。

学校図書館の蔵書のデータベース化については、小学校では18校、中学校では12校対応しているが、まだまだ少ない状況。予算措置は非常に厳しい。各学校で進めて頂きたい。今後もなんとか組み込める余地がないかこれからも探っていく。

事務局（図書館）

図書館のデータについては、市販MARCを購入したものを市立図書館でさらに加工して使用しており、そのまま提供するわけにはいかないが、淀川区だけでなく他の学校からの要望も聞いているので、継続して一緒に考えていきたい。

大阪市立図書館では、学校図書館への書誌データダウンロード機能は提供していない。市販 MARC は市立図書館 24 館分の使用許諾の著作権料を支払っており、機器リースやネットワーク経費等も含めると、300 校分追加するのは別途膨大な経費が必要。実現した時の効果は認識しているものの市財政緊迫の折、課題は大きい。データ遡及には多大なる尽力をおかけしており、ご指摘の観点、視点は認識している。これまでも経費をかけない方向でどんなことが出来るか研究課題として捉え提案等もしてきた経緯がある。

事務局

本日頂いたご意見をもとに、素案（案）の修正を行い、それをもって平成 25 年 1 月にパブリックコメントを実施する。パブリックコメントで寄せられたご意見をもとにさらに修正を加え、最終の策定は平成 25 年 3 月を予定している。本日お渡しした素案（案）については、このパブリックコメントの段階で変更されるのでご承知おきいただきたい。

最終の素案は、パブリックコメントにて発表させていただくので、そちらをご覧いただき、ご意見を頂戴したい。

平成24年度大阪市子どもの読書活動推進連絡会出席者名簿

(平成24年10月12日)

お名前 (敬称略)	代表区分	所属・役職名等
脇谷 邦子	学識経験者	同志社大学嘱託講師、元府立図書館こども資料室長
木原 俊行	学識経験者	大阪教育大学教授
大橋 妙子	社会教育関係団体	大阪市PTA協議会研修委員長
中村 寛子	社会教育関係団体	大阪市PTA協議会広報委員長
柳本 真知子	社会教育関係団体	大阪市生涯学習推進員協議会運営委員長
吉田 典子	社会教育関係団体	大阪市生涯学習推進員協議会副運営委員長
三味 裕子	社会教育関係団体	大阪市生涯学習推進員協議会副運営委員長
青山 麻子	区の子どもの読書活動推進連絡会代表	北 豊崎東小学校・学校図書館支援ボランティア
北本 美和子	同上	都島 絵本の会 ふぁいと
平尾 良子	同上	福島 マトリョーシカ
辻 廉子	同上	此花 此花図書館絵本の会
釣島 恭子	同上	中央 絵本の会島之内
三浦 京美	同上	西 絵本の会西
西山 恵津子	同上	港 絵本の会みなど
伊藤 久子	同上	大正 ひまわりの会
三輪 みどり	同上	天王寺 わかば文庫
上田 道代	同上	浪速 なにわえほんの会
鵜久森 典子	同上	西淀川 絵本の会・ぼけっと
松尾 佳美	同上	淀川 神津小学校絵本のくに
渡邊 裕美子	同上	東淀川 おはなしボランティアとことこ
手嶋 昭子	同上	東成 絵本の会東成
南 聡美	同上	生野 絵本の会生野
牧野 裕子	同上	旭 旭おはなしたい・すみれ
樋口 恭子	同上	城東 城東絵本の会
林 幸子	同上	鶴見 でんでんむし
町野 正彦	同上	阿倍野 絵本の会あべのあのねのね
古田 年美	同上	住之江 絵本の会住之江
山田 逸子	同上	住吉 住吉絵本の会
小路 君代	同上	東住吉 おはなしたまてばこ
堺 紀久子	同上	平野 平野図書館 絵本の会
津村 陽子	同上	西成 絵本の会西成

平成24年度大阪市子どもの読書活動推進連絡会事務局名簿

(平成24年10月12日)

教育委員会事務局中央図書館

所 属	氏 名
中央図書館館長	辻本 尚士
中央図書館副館長	高橋 俊郎
中央図書館総務担当課長	大対 好行
中央図書館利用サービス担当課長	小前 恭則
中央図書館地域サービス担当課長	大久保 典子
中央図書館地域サービス担当課長代理	中尾 滋
中央図書館利用サービス担当課長代理	川窪 和子
中央図書館利用サービス担当課長代理	宮田 英二
中央図書館 担当係長	田野 晶子
〃 〃	鎌田 恵子
〃 〃	角田 人志
〃 〃	小西 敏章
〃 〃	戸倉 信昭
北図書館長	竹田 君代
都島図書館長	波多野 圭子
福島図書館長	米川 くりえ
此花図書館長	池上 也之保
島之内図書館長	槇 加奈子
港図書館長	小林 崇子
大正図書館長	正井 文博
天王寺図書館長	藤江 千恵
浪速図書館長	森家 さち子
西淀川図書館長	赤堀 祐子
淀川図書館長	土田 智美
東淀川図書館長	柴田 晴美
東成図書館長	平田 満子
生野図書館長	浅川 裕俊
旭図書館長	藤井 直美
城東図書館長	井上 由美子
鶴見図書館長	山田 和伸
阿倍野図書館長	齊藤 美子
住之江図書館長	縣 和世
住吉図書館長	川嶋 恵子
東住吉図書館長	吉田 和彦
平野図書館長	齋藤 健一
西成図書館長	成元 勝

教育委員会事務局指導部

所 属	氏 名
指導部 首席指導主事	坪井 宏暁
指導部 担当係長	檜崎 佳代

教育委員会事務局生涯学習部

所 属	氏 名
生涯学習担当課長	濱崎 正行
生涯学習部 副参事兼担当係長	松村 智志

